

渡辺由美子

さん

●NPO法人キッズドア 理事長

みんなにとっても大事な子どもたちを
みんなで支え育てる時代へ

10年以上前から無料学習支援を中心に活動を続けてきたNPO法人キッズドア理事長の渡辺由美子さん。イギリスの教育環境を体験することで気づいた日本の現状への疑問が、現在の活動につながっている。「NPO法人」が何かさえも、福祉のことも、知らないところからのスタートだった。

●取材・文……太田美由紀（ライター）

ひとり親世帯の多くは
コロナ禍で厳しい状況に

「いま、ひとり親世帯の多くはコロナ禍で収入が減少しています。例えば完全歩合制の営業なら基本給だけになってしまったり子どもの塾代を払うことができなくなりました。パートの人は店が休業になれば仕事はなくなり、食費を削るしかない家庭も増える一方です。これまで活動の根幹だった学習支援事業だけでなく、困窮家庭の保護者

の支援が必要だと切実に感じています」NPO法人キッズドア代表の渡辺由美子さんは、昨年から続く新型コロナウイルス感染症による子育て家庭への影響に強い懸念を示している。

平成19年に任意団体としてキッズドアを立ち上げ、2年後にNPO法人格を取得して以来、低所得世帯のための無料学習支援を続けてきた。「子どもの貧困」はその子どもが育つ家庭の困窮問題である。キッズドアが運営する全国の困窮子育て世帯への

子どもの貧困は
体験の貧困につながる

渡辺さんの活動は、日本の子育てや教育にかかる費用への疑問からスタートしている。渡辺さんは平成13年の春から1年を家族とともにイギリスで過ごしたが、帰国後、イギリスと日本の教育環境のギャップに驚いたという。

「イギリスは義務教育が1年早く、長男が年長だったので、日本の小学校を経験しないままイギリスで小学校に通い始めまし

た。一番驚いたのは教育にお金がかからないこと。制服やスクールバッグはありませんが安価なもので、さらに1年だけなら買う必要はなく、落ち着いた色ならいいと言われました。文房具も学校に寄付されたものを共同で使い、集金も一切ありません」一方、帰国すると日本の小学校の準備は大変だった。高価なランドセル、鍵盤ハーモニカ、体操服に上履き、文房具。学校が始まってからも何度も集金がある。

「イギリスでは比較的生活環境のいいエリアに住んでいましたが、経済格差は大き

く、船舶を所有しているような家もあれば生活が困窮している家もありました。それでも、子どもたちの教育は国や地域の人たちがしっかりと支え、各家庭の経済状況に教育が左右されることもなければ、子どもが学校に通うことで困窮家庭の生活が逼迫（ひびく）することもありません。日本ではそうした配慮がほとんど見られず、大変な家庭はどうしているのかと疑問に思いました」

Profile

●わたなべ・ゆみこ●

千葉大学出身。大手百貨店、出版社を経て、フリーランスのマーケティングプランナーとして活躍。2007年、任意団体キッズドアを立ち上げ、2009年内閣府の認証を受け特定非営利活動法人キッズドアを設立。内閣府子どもの貧困対策に関する有識者会議構成員。厚生労働省社会保障審議会・生活困窮者自立支援及び生活保護部会委員。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会副代表理事。著書「子どもの貧困～未来へつなぐためにできること～」（水曜社）。



校に顔を出さない」「その子が家に遊びにくると、夕方なかなか家に帰らないから困る」「子どもの面倒をちゃんと見ないからそんなふうになるんだ」

その家族への視線は日に日に厳しくなっていく。その子が渡辺さんの家に遊びにくるようになり、お母さんが仕事で遅くまで帰ってこないこと、夏休みにどこへも行かないからゲームをするしかないこと、宿題を家で見てもらえる時間がないことなどに気がついた。

「その子は、夏休みに一緒に博物館に連れて行っただけで、『生きていて一番楽しかった』と言ってくれました。友達と電車に乗って出かけたこともなかったのです。そんなに喜んでもらえるなら、もつと社会的な活動にしたいと思いい、子どもたちの体験を支えるイベントの企画を始めました」

子どもの将来を学習でサポートしたい

「子どもが中学生になると塾に通う子も増え、教育にますますお金がかかるようになります。とても魅力的だった息子の友人たちが家庭環境のために不登校になったり、輝きを失ってしまったりすることもあ

り、とても残念に思いました。お金がないことと人間性の優劣には全く関係がありません。お金がないから将来を失ってしまうという状況を少しでもサポートしたいと思いい、無料の学習支援を始めました」

大学生のボランティアを募り、学童保育の子どもたちに算数を教えている様子が小さな新聞に掲載されると、翌日から問い合わせが殺到した。その多くはひとり親家庭からのものだった。「高校受験の勉強を教えてほしい」という。直接教えるには限界がある。無料学習支援の仕組みを作って支援できる子どもたちを増やしながら、学習環境の現状を伝えるイベントも行い、国からの根本的な支援につなげられないだろうか。そんな思いが湧いてきた。

「もともと、百貨店の販売促進部でキャリアを積んでいたもので、イベントの企画やチラシの作り方、メディアを呼ぶノウハウなどがあつたことも良かったと思います。大きな課題ですから解決までには時間がかかります。活動を持続可能にするにはお金を回さなければなりませんから、スタッフの仕事として関われる仕組みを作る必要があると最初から思っていました。本当は、私たちの活動が不要な世の中になればいいの

演・イベントでの発信も欠かさない。キッズドアのこうした活動へのニーズは高く、自治体の児童福祉課、子ども支援課、教育委員会などからの依頼も多い。ソーシャルワーカーや保健師の紹介で学習会に参加するようになった子どもたちもいるという。

子どもだけでなく保護者への就労支援も

「根本的な問題は、やはりお金がないことです。経済的な理由で昼食を抜く子もいれば、塾に行けない、部活ができないという子もいます。働きづめで疲れ果てている大人しか見ていなければ、仕事をすることも希望が持てません」

令和3年2月、キッズドアでは、困窮家庭の保護者へ就労支援のオンラインプログラム「わたしみらいプロジェクト」を立ち上げた。

「日本の貧困問題はワーキングプアです。パートを掛け持ちで働いている方は時間もお金にも余裕がなく、スキルアップをすることができません。今の生活から抜け出す方法を持ち合わせていませんでした。しかし、コロナ禍に普及し始めたオンライン講座なら、忙しいお母さんたちも家で講座を

受けることができます」

隔週土曜日の午前中1時間半、全6回のコース。定員50名はすぐに埋まった。ライフ&キャリアプラン、履歴書の書き方、面接のコツ、メイク講座などを終えると、参加者の表情は目に見えて明るくなったという。協力企業とのマッチングも行った。

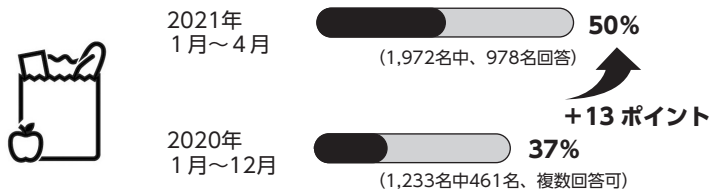
「とても自信が ついた」という感想をたくさんいただきましたし、女性の力を必要としている企業もたくさんあります。この事業はまだ動き出したばかりですが、これからも継続していきたいと考えています」

渡辺さんはこれまでの活動を振り返り、最後にこう言った。

「大変な状況にいる子どもも大人も、誰か一人、優しい眼差しを持って気にかけてくれる人がいることで気持ちや行動が変わっていきます。学習会に途中で来なくなっ

2021年4月現在の困窮子育て世帯の現状

(1) お金が足りなくて食料を買えないことがあったと回答した方が、昨年12月より、**13ポイント増**



(2) コロナ禍の影響により学力への影響が「悪くなった」と回答した方が**46.5% (917名)**

◆休校などコロナの影響により、お子さんの学力に変化はありましたか



※「変化なし」51.1%・良くなった2.4%

「キッズドアファミリーサポート」にて実施した「春の食料支援」(2,000世帯)の際のアンケート結果より

まう子もいますが、私たちは必ず、今日はどうですかと連絡を続けます。そうすると3か月後に戻ってくる子もいる。自分のことを気にかけて声をかけてくれる人、そういう存在になることは、近所の人でも保健師さんでも、誰でもできることです。それが私の活動の原点だと思っています」

ですが」

現在、主な活動は中学生の無料学習会。令和2年度はコロナ禍で学習会に通う子ども数が減ったものの、生徒数は1498人、ボランティアは748人、関東、東北を中心とした日本全国で74か所で開催した実績がある。

そのほか、食事ができる居場所支援、オフィスツアーや農作業体験などの体験活動、実態の調査・研究、それらをもとにした政策提言、ボランティアの人材育成や講

キッズドアファミリーサポートに登録している方の状況 (2021年4月現在の登録人数：2,274人)

